

## 〔課題演習抄録〕

主体的な児童を育てる小学校社会科の単元構成の工夫  
—6年生の歴史授業における新聞作成を通して—

齋 藤 光 希

Mitsuki SAITO

福岡教育大学大学院教育学研究科教職実践専攻教育実践力開発コース

キーワード：社会科，歴史授業，新聞づくり，新聞活用，情報集めシート，情報整理シート

## 1 研究の目的

私は、児童が「問い」に対して、これまでの知識や学習を土台とし、自分なりの考えや価値観を持つこと、その考えや価値観を他者に対して表現することが大切であると考えている。このことは文部科学省も「言語活動の充実に関する指導事例集」において、平成21年度実施のPISA調査の結果報告と関連付けて言及をしている。

一方、全国学力学習状況調査報告書(2012)の概要では「記述式問題を中心に課題」があること、特に、教科に関する調査の結果では「複数の情報を関係付けた上で、条件に合わせながら自分の考えをまとめて記述すること」が課題としている。

そこで本研究では、児童が自分なりの価値観や考えを形成し、他者へ表現するための単元構成や方法を明らかにすることを目的とする。

## 2 研究の計画

K市立H小学校にて、第6学年2組の27名を対象に、以下のような、研究の実践授業を行った。

M2	単元名	時数
前期	元の大軍が攻めてきた	3時間
後期	長く続いた戦争と人々の暮らし	7時間

また、児童へ実践授業に対するアンケート調査を実施した。

## 3 研究の内容

## (1) 先行研究の整理

まず、現在の小学校社会科学習の実態や課題を整理した。ここでは、文部科学省教科調査官澤井陽介氏の「社会科の授業デザイン」を基に述べていく。彼は、例として、児童の考えに対し、「教師

にとって都合の良い意見だけを取り出してまとめてしまう」授業などに言及している。

その一方、『児童・生徒主体の授業』の定義にかかわる諸特徴の峻別で山田雅彦氏は、児童主体の授業の要素として、『体験型』の学習スタイルや「切実な課題」の大切さを説いている。

陥りがちな授業のスタイルに気を付け、児童主体の授業に必要な要素を意識するという点から、上記で述べられていることを参考にしつつ私がめざす今日的な授業構想と方法を試みた。

## (2) 本研究について

本研究について述べる。まず始めに単元構成の工夫についてである。概要は下の図のようになる。

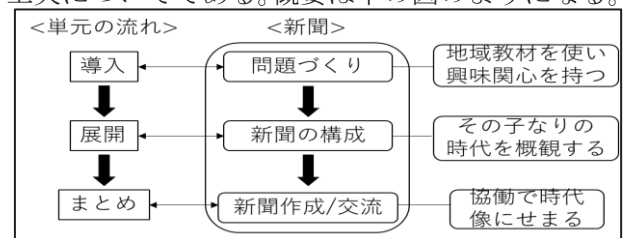


図1「単元の流れと新聞づくりの関係性」

単元構成では、導入、展開、まとめがそれぞれ新聞の問題づくり、新聞の構成、新聞作成と交流に繋がるようにした。導入の問題づくりで解決のための情報収集、展開の新聞の構成で情報整理、まとめで新聞作成と交流を行う。これにより学習の流れに自然に新聞を織り込むことを試みた。

次に教材との出会い方である。具体的には、地域教材を活用し、前期では「元寇の石塁実寸大モデル製作」、後期では「福岡大空襲」に関する最近の特集記事を載せた市販の実際の新聞を用いた。

そして、新聞づくりの手順の明確化と手立てを実施した。以下のような手順と流れになる。

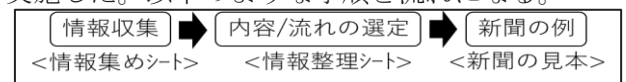


図2「新聞づくりの際の手順と手立て」

情報収集から内容選定、新聞の例を見るという流れに沿い、それぞれで情報集めシート、情報整理シート、児童作成の新聞を書くときの見本(以下書くときの見本とする)を用いて児童の新聞づくりの充実をねらった。

以上の「単元構成」、「教材との出会い方」、「新聞づくりの手順の明確化と手立て」の3つにより、児童が主体的に、そして自身の独自性を発揮できる新聞づくりに関わる社会科授業を行った。

作成された新聞と図2で実施した手立てのうち、どれが最も有効であるかを問う事後アンケート調査を併用して、数値データ化し、証明を試みていくという点が本研究の独自性である。

#### 4 成果と課題

まず、児童が実際に作成した新聞を次の視点で見えていく。①資料の数、②全体の分量、③カットや図の使用、④社説で自分なりの戦争観(価値観)の表現、⑤当時の様子を具体的に記述、である。この視点を基に前期・後期製作の新聞をA～Dの4段階で評価していく。評価の結果は下の表の通りである。

表1 児童が作成した新聞の評価[25名(2名欠席)]

評価の詳細	前期作成新聞	後期作成新聞
様々な当時の出来事を資料を踏まえて判断・評価し、自分なりの考え・展望を述べている。(A)	0人	7人
当時の出来事を資料を踏まえて判断し、自分なりの考えを述べている。(B)	2人	10人
当時の出来事を整理して感想を述べている。(C)	11人	6人
事実列記や感想のみ述べている。(D)	12人	2人

前期作成の新聞と後期作成の新聞を比較したとき、評価(A)や(B)の人数が増加し、(C)や(D)が減少したことが分かる。また前期・後期で作成した新聞のサイズが違うため、単純比較がしにくい部分もあるが、①～⑤全ての項目において前期よりも後期の方が改善が見られた。特に視点「③カットや図の使用」は、前期では使用者がほぼいなかったが、後期では全員が使用した。視点「④社説で自分なりの戦争観(価値観)の表明」は、前期と比較してより深い考え(考察)になっていた。上記③、④は変化が著しい所であった。

次に、アンケート調査の結果を見ていく。児童27名を対象とし、新聞づくりの際に役だったもの(実際の新聞、情報集めシート、情報整理シート、書くときの見本)を「とても役に立った～役に立たなかった」の選択肢から回答してもらい、次のような結果となった。

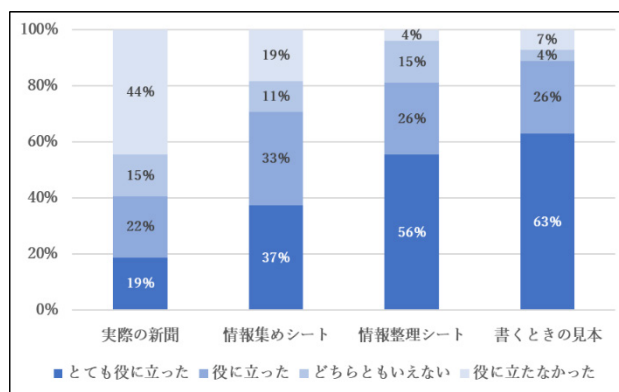


図3 新聞づくりのときに役に立ったもの

「とても役に立った」と「役に立った」の回答を合わせると、実際の新聞は41%、情報集めシートは70%、情報整理シートは82%、書くときの見本は89%という数値となった。

前期では、実態把握ということもあり、私(教師)はあまり介入を行わなかった。しかし、「何を作ればよいか分からない」、「どういった手順で行えばよいのか」という質問が多かった。つまり、取材(情報収集)から情報をどう加工するのか(情報整理)に課題があった。ここで情報集めシートや情報整理シート、書くときの見本を活用することにより、児童が円滑に新聞づくりを行えることに繋がったと考えられる。特に情報整理シートや書くときの見本は、有効な手立てであったことが分かった。

ここまでの成果をまとめると「新聞の評価」を通して「新聞の内容や質・量」に改善が見られた。社説で自己の考え・気持ちをしっかり書くことが出来た37%、書くことが出来た52%というアンケート調査での数値やその他の調査項目からも分かるように、単元構成の工夫や教材との出会い方、新聞づくりの手順の明確化といった要素が関係していると考えられる。

一方で課題もある。まず評価(C)(D)の児童の数が減少したものの、まだ何名か該当すること。また、手立てとして用いた「実際の新聞」が新聞づくりの際、あまり活用されていないことである。ここが今後の課題であると捉えられる。

#### 主な引用・参考文献

- 国立教育政策研究所 2012 「平成24年度全国学力・学習状況調査 報告書・集計結果」について 国立教育政策研究所
- 文部科学省 2011 言語活動の充実に関する指導事例集[小学校版] 文部科学省
- 澤井陽介 2015 澤井陽介の社会科の授業デザイン 株式会社東洋館出版社
- 山田雅彦 2015 「児童・生徒主体の授業」の定義にかかわる諸特徴の峻別 教職研究 27巻 11-21